

# チェックリスト③

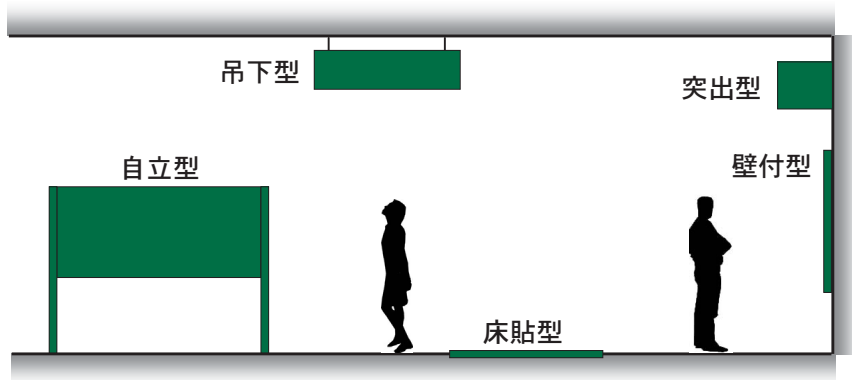
【視点3】 わかりやすさ・・・さまざまな建物利用者へわかりやすい情報提供が行われているか

## 【視覚情報サイン】

項目	チェック内容	参考例
デザイン	<input type="checkbox"/> 簡潔で、統一感があるデザインとする 例) 建物サインの種類ごとにデザインを統一する、など	● 情報内容が理解しやすい表現の例 (p19)
情報内容	<input type="checkbox"/> 誰もが理解しやすい表現とする 例) 必要な情報が必要な場所にある、優先度の高い情報を目立たせる、一般的な図記号を利用する、など	
<b>設置方法</b>		
配置	<input type="checkbox"/> 建物利用者の主な移動経路を考慮して、安全で気づきやすい場所にサインを設置する 例) 建物案内図などの案内サイン、立ち入り禁止などの規制サイン、など <input type="checkbox"/> 建物利用者が連続的に情報を得られる間隔でサインを設置する 例) 諸室等への経路を示す誘導サイン、など <input type="checkbox"/> 説明・規制サインは、対象諸室・器具等の間近に設置する	● 「建物アプローチ」から「情報拠点」までの建物サインの例 (p16) ● 建物サインの掲出方法 (p19) ● 近距離から見る建物サイン (p20) ● 遠距離から見る建物サイン (p20)
高さ向き	<input type="checkbox"/> 建物利用者の主な移動経路に対面する向きでサインを設置する 例) 諸室等への経路を示す誘導サイン、など <input type="checkbox"/> 近距離で見るサインは、周囲からの近づきやすさに配慮するとともに、車いす使用者、高齢者、子ども等の視野を考慮した高さとする <input type="checkbox"/> 遠距離から見るサインは、車いす使用者、高齢者、子ども等の見上げの角度や見通しを考慮した高さとする	
文字・図記号	<input type="checkbox"/> 文字の書体、大きさ、レイアウト等は、さまざまな建物利用者にとって見やすいものとする <input type="checkbox"/> 文字表現は、短い文章、簡単な言葉とする <input type="checkbox"/> 建物利用者を想定し、外国語やふりがなを併記する <input type="checkbox"/> 建物利用者を想定し、図記号 (ピクトグラム) は、一般的なものとする	● 文字の書体と大きさ (p21) ● 文字と図記号の大きさ (p21) ● 標準案内用図記号 (p30)
色彩・光	<input type="checkbox"/> 文字や図記号に色をつける場合、見やすい色の組み合わせとする <input type="checkbox"/> 建物サイン及び周辺の明るさを確保する <input type="checkbox"/> 照明等の反射がおこらない素材とする	● 色彩表現の留意点 (p22)

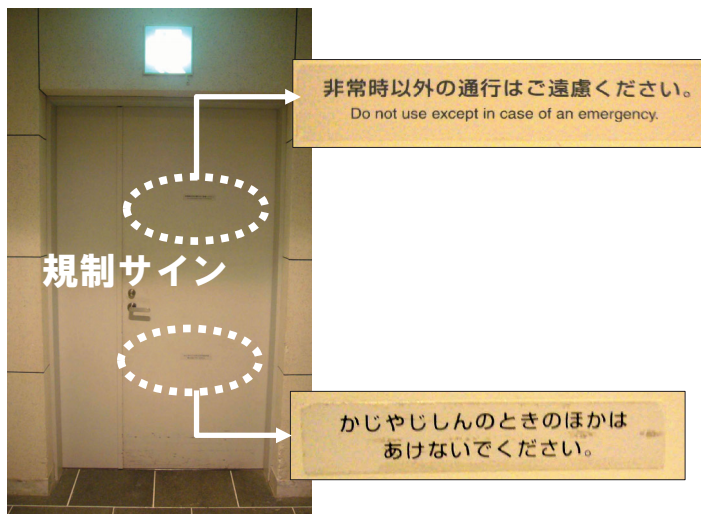
## ●建物サインの掲出方法

分類	特徴と留意点
吊下型	○天井から吊り下げる方法で、天井直付型やペンダント型等がある。 ○安全性確保のため高い位置に設置するので混雑時や遠距離からの視認性に優れている。
突出型	○壁や柱から、通路方向などに突出して取り付ける方法。 ○安全性確保のため高い位置に設置するので混雑時や遠距離からの視認性に優れている。
壁付型	○壁に平付けにする方法で、埋込み型、半埋込み型、壁外付型等がある。 ○主に近距離から見る建物サインの掲出方法であるため、近づきやすさを考慮し、設置場所の工夫や障害物の撤去などを行う。
自立型	○路面上に取り付ける方法で、固定型と可搬型がある。 ○主に近距離から見る建物サインの掲出方法であるため、近づきやすさを考慮し、設置場所の工夫や障害物の撤去などを行う。
床貼型	○床面に取り付ける方法。 ○複雑な移動経路を示す場合、確実な規制などが必要な場合など、壁付型等の他サインと組み合わせて使用することができる。



## ●情報内容が理解しやすい表現の例

○建物利用者にとって必要な情報内容が必要な場所に理解しやすい表現で示されることが重要です。



規制サインが外国人や子どもの目線で読める位置と内容で示されている例



トイレの男女別と方向だけでなく、距離の情報も示されている例

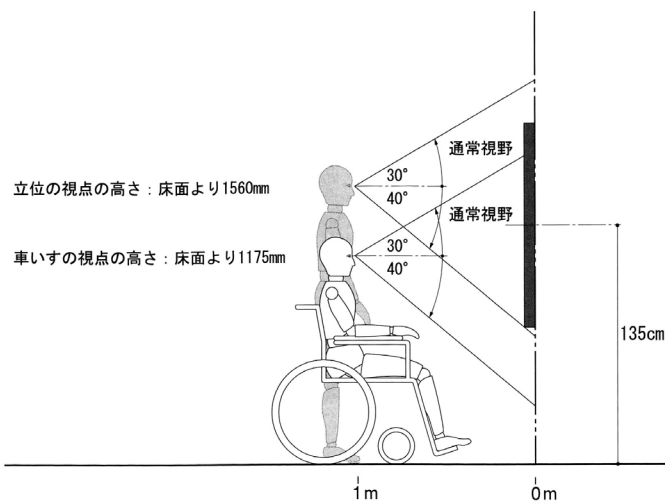


矢印だけではなく、廊下の壁に帯状のサインを設置し、誘導している例

## ●近距離から見る建物サイン（主に壁付型・自立型）

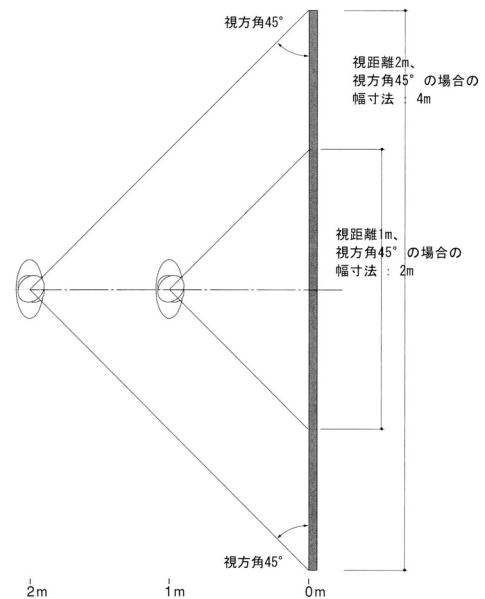
- 板面の中心をさまざまな建物利用者が見やすい高さに設置します。立位の利用者と車いす使用者の視点の中間の高さとされている 135 cm 程度が適当とされています。尚、情報量が多い地図などで、車いす使用者にとって地図上部の判読が困難であると想定される場合には、125 cm 程度とすることが望ましいとされています。（図 1）
- 建物サインの幅寸法は、表示する情報量と文字の大きさの判断に加えて、誤読されない視方角にも考慮して設定する必要があります。視方角が 45 度以下では表示内容の誤読率が増加するとされています。（図 2）

【図 1】掲出の高さの考え方



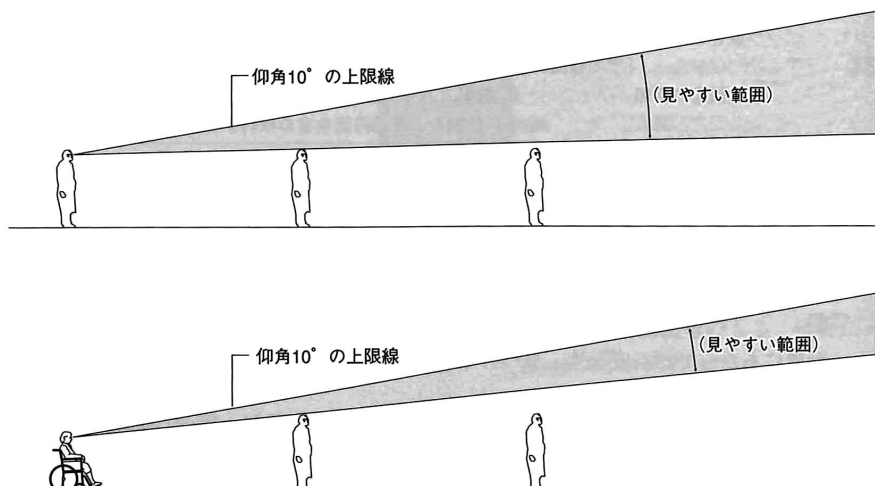
【出典】公共交通機関旅客施設の移動円滑化整備ガイドライン  
(交通エコロジー・モビリティ財団/H13.8)

【図 2】幅寸法限界の考え方



## ●遠距離から見る建物サイン（主に吊下型・突出型）

- 遠距離から見る建物サインは、見やすい範囲を考慮して設置するとともに、距離に応じて、板面の寸法、文字や図記号の大きさ、情報量を設定します。
- 建物利用者にとって見やすい範囲は、視点から見上げ角 10 度以下がよいとされています。また、建物の混雑時、前方に建物利用者がいた場合でも、建物サインが隠れないことにも配慮する必要があります。



【出典】観光活性化標識ガイドライン（国土交通省総合政策局/H17.6）

## ●文字の書体と大きさ

- 文字の書体は、ゴシック体が視認性に優れているとされています。(図1)
- 建物サインまでの距離(視距離)に応じて判読できる標準的な文字の大きさは下表とされています。尚、視距離については、近距離から見る建物サイン(自立型や壁付型等)は4~5m以下、案内サインの見出しなどは10m程度、遠距離から見る建物サイン(吊下型や突出型等)は20m以上に設定することが一般的とされています。(図2)
- 日本語では指定書体の「木」、アルファベットでは「E」が文字高さとしてされています。(図3)

【図1】角ゴシックの書体例



【図2】文字の大きさの選択の目安

視距離	和文文字高	英文文字高
30mの場合	120mm以上	90mm以上
20mの場合	80mm以上	60mm以上
10mの場合	40mm以上	30mm以上
4~5mの場合	20mm以上	15mm以上
1~2mの場合	9mm以上	7mm以上

【図3】文字高



注) 建物利用者に高齢者などが多い、建物サイン周辺の照明が十分に得られないなどの特殊な状況では、JIS規格(JIS S 0032)を参考にするなど適切な対応が望まれる。

【出典】観光活性化標識ガイドライン  
(国土交通省総合政策局/H17.6)

## ●文字と図記号の大きさ

- 英語は、日本語と同程度に判読できるよう日本語の4分の3程度、図記号は英語の3倍以上の大きさが標準とされています。(図1、図2)
- ただし、建物利用者に高齢者などが多い、建物サイン周辺の照明が十分に得られないなどの特殊な状況では、JIS規格(JIS S 0032)を参考にするなど、適切な対応が望まれます。

【図1】文字と図記号のスケール



【図2】地図内の標準的な文字や図記号(ピクトグラム)のスケール

	ピクトグラム	和文	英文
凡例部表示	24.0mm	10.5mm	8.0mm
特大サイズ	—	18.0mm	14.0mm
大サイズ	21.0mm	9.0mm	7.0mm
中サイズ	16.5mm	7.0mm	5.5mm
小サイズ	12.0mm	5.0mm	4.0mm

注) 視距離 50cm を想定  
注) 案内所、情報コーナー、県庁、市役所、区役所、博物館、美術館、ホールなど、移動の目的地となる主要な施設の表示には、大サイズを用いるよう示されている。

【出典】観光活性化標識ガイドライン(国土交通省総合政策局/H17.6)



## ●色彩表現の留意点

### (1) 建物サインにおける色彩表現の基本的な考え方

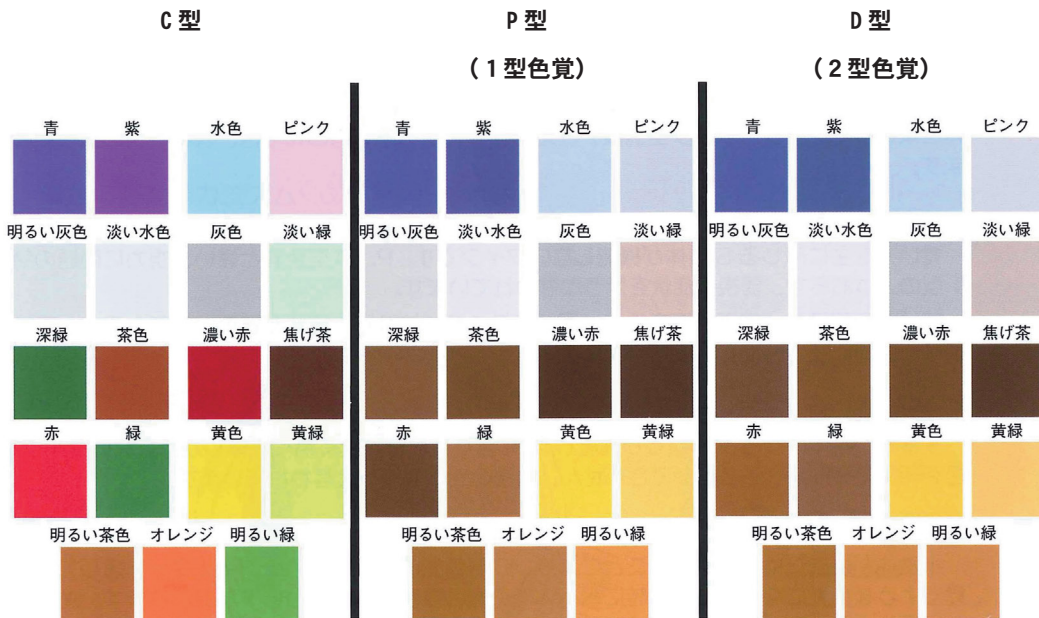
- 高齢者や弱視の方、色覚障害者の方などに配慮し、図と地の明度差や彩度差を大きくすることでコントラストを強め、見やすくすることが基本となります。文字については、暗い地色に白などの明るい文字色とすると膨張効果で文字が大きく見え、文字周囲の周辺光が遮断される読みやすくなるとされています。
- 例えば、現在位置や建物の対象階、諸室の用途の区別などを文字ではなく目立つ色や色分けで示すことは、理解しやすい表現の工夫のひとつですが、区別が必要な情報については、色と文字・図記号などを組み合わせたり、形状やパターンを変化させるなど、色だけに頼らないことが必要です。色の違い自体が情報を含む場合には、色名を文字で表示する配慮も必要です。
- また、色彩表現は、各種法令・基準等で色が規定されている標識等の効用を妨げないように留意する必要があります。

【参考】観光活性化標識ガイドライン（国土交通省総合政策局/H17.6）

### (2) カラーユニバーサルデザインの推進

- 日本人男性の約 5%、女性の約 0.2%は特定の範囲の色の差を感じにくい状態（色覚障害）であるといわれ、人間の色の感じ方は一様ではないことがわかっていますが、そうした色覚の多様性に配慮すること（色覚バリアフリーやカラーユニバーサルデザイン）は必ずしも進んでいるとはいえないのが実情です。
- 建物サインに色を使う場合、文字と背景色は明度差のある色を組み合わせたり（例：明るい背景に暗い文字）、色だけに頼った情報伝達をしない、色名によるコミュニケーションが予想される場合は色名をサインに明記する、などカラーユニバーサルデザインを意識することが重要となります。

#### 【色覚障害のタイプの違いによる色の感じ方の違いと混同する色の組み合わせ】



C型（一般）の見え方

P型とD型の見え方（シミュレーションした場合）

【図版提供】NPO 法人 CUDO

- (※) 目の網膜上には赤、緑、青をそれぞれ感じる3種類の錐体細胞がありますが、いずれかの細胞がうまく機能しないことにより特定の範囲の色の差を感じにくくなります。この状態を色覚障害と言い（色弱、色覚異常、色覚特性とも言う）、赤錐体の機能障害（P型/1型色覚）、緑錐体の機能障害（D型/2型色覚）とも赤～緑の波長域において色の見分けが困難になる場合があります。また3種類の錐体細胞すべてに機能障害が起こると、色を明暗でしか感じることができない、いわゆる全色盲となります。

## 【色覚障害のタイプの違いによる色の見え方の具体例】

C型



P型  
(1型色覚)



D型  
(2型色覚)



【図版提供】NPO 法人 CUDO

### (3) 建物サインにおける色彩表現のチェックポイント

色の選び方
<input type="checkbox"/> 赤は、濃い赤を使わず、朱色やオレンジを使う
<input type="checkbox"/> 黄色と黄緑は、赤緑色覚障害の方にとっては同じ色に見えるので、なるべく黄色を使い、黄緑は使わない
<input type="checkbox"/> 暗い緑は、赤や茶色と間違えるので、青みの強い緑を使う
<input type="checkbox"/> 青に近い紫は、青と区別できないので、赤紫を使う
<input type="checkbox"/> 細い線や小さい字には、黄色や水色を使わない
<input type="checkbox"/> 明るい黄色は、白内障の方にとっては白と混同するので使わない
<input type="checkbox"/> 白黒コピーしても、内容を識別できるか確認する
色の組み合わせ方
<input type="checkbox"/> 暖色系と寒色系、明るい色と暗い色を、対比させる
<input type="checkbox"/> パステル調の色どうしを、組み合わせない。はっきりした色どうしか、はっきりした色とパステル調の色を、対比させる
文字に色をつけるとき
<input type="checkbox"/> 背景と文字の間に、はっきりした明度差をつける（色相の差ではなく）
<input type="checkbox"/> 線の細い明朝体ではなく、線の太いゴシック体を使う
<input type="checkbox"/> 色だけではなく、書体、太字、イタリック、傍線、下線、囲み枠など、形の変化を併用する。ただし、全体的にすっきりしたデザインとする

【出典】福祉のまちづくりを進めるためのユニバーサルデザインガイドライン（東京都福祉保険局/ H18.1）

## 【聴覚情報サイン】

項目	チェック内容	参考例
音の種類	<input type="checkbox"/> 音の種類を統一する <input type="checkbox"/> 他施設での一般的な音の使い方と整合させる 例) 玄関等の出入口を示すピンポン音、など	●音声・音響案内の考え方 (p24)
音量、音質	<input type="checkbox"/> 他の音と混在せず、聞き取りやすい音量・音質とする <input type="checkbox"/> 不快感のない音量・音質とする	
音の方向	<input type="checkbox"/> 反射エコーなどがおこらないようにする <input type="checkbox"/> 音源の位置が把握しやすいようにする	
言葉による案内 (音声案内)	<input type="checkbox"/> 聞き取りやすい簡潔な表現とする <input type="checkbox"/> 簡易に使える音声案内端末等の活用を適宜検討する	

## 【触覚情報サイン】

項目	チェック内容	参考例
視覚障害者誘導用ブロック	<input type="checkbox"/> 連続して敷設する <input type="checkbox"/> 周囲の色と区別する <input type="checkbox"/> 適切な凹凸の高さ、素材とする <input type="checkbox"/> 廊下の幅員・段差・傾斜、出入口や利用設備の位置などを考慮して敷設する	●視覚障害者誘導用ブロックの敷設の例 (p25)
手すり	<input type="checkbox"/> 連続して設置する <input type="checkbox"/> にぎりやすい位置、太さ、素材とする <input type="checkbox"/> 主な要所に、点字、立体絵記号、墨字を設置する	●手すりのサインの例 (p25)

### ●音声・音響案内の考え方

- 視覚障害者の方が建物内で音から得られる主な情報としては、①音源の位置、②音源以外のものの位置（反射音などが手がかり）、③諸室等の広さや構造（室内の残響などが手がかり）などがあります。
- また、さまざまな物や人が発する音から情報が得られる場合があります。たとえば「釣銭の音で券売機の位置がわかる」「話し声でどちらが男子トイレか女子トイレかを判別する」などです。しかし、これは不確定な音情報であり、状況によっては利用できません。視覚障害者の方が確実に音情報を利用できるためには、不必要に大きい騒音や音楽を排除し、確定的な音情報を人工的に配置することが重要となります。

#### 【音響案内の標準例】

- 鉄道駅改札口：「ピン・ポーン」またはこれに類似した音響
- プラットホーム上の階段：鳥の泣き声を模した音響
- 地下鉄の地上出入口：「ピン・ポーン」またはこれに類似した音響

【出典】公共交通機関旅客施設の移動円滑化整備ガイドライン追補版（交通エコロジー・モビリティ財団/H14.12）



## ●視覚障害者誘導用ブロックの敷設の例

- 視覚障害者誘導用ブロックは、歩行の方向を誘導する「線状ブロック」と方向転換や停止・危険などを注意喚起する「点状ブロック」で構成され、視覚障害者の方の移動を誘導する最も有効な情報伝達方法のひとつとなっています。
- 形状は、JIS規格（JIS T9251）によるものとし、複雑な経路設定は避け、できるだけシンプルで安全に移動できる経路を誘導する敷設を行うことが必要です。

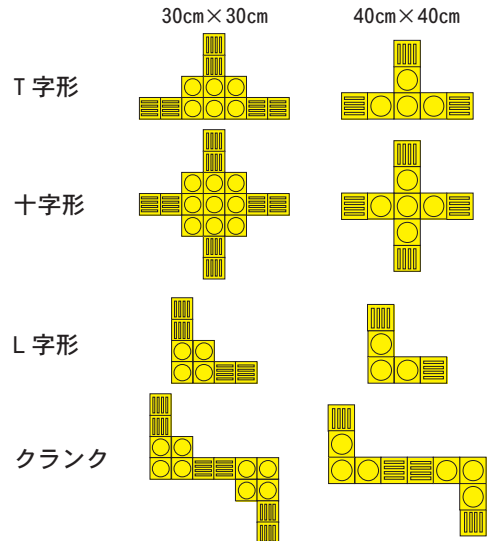


ブロックの色が周囲床と同じであり、弱視の方には識別しにくい

改善の一例：  
両端への認識用テープ貼り付け



### 【分岐部・屈曲部の敷設方法の例】



【参考】公共交通機関旅客施設の移動円滑化整備ガイドライン（交通エコロジー・モビリティ財団/H13.8）

## ●手すりのサインの例

- 手すりは、<sup>したい</sup>肢体不自由者の方の歩行を補助する役割があるとともに、視覚障害者の方にとってはそれ自体が目的の諸室等に誘導してくれるサインとなります。
- よって、エレベーター前、トイレ・諸室等の出入口、廊下交差部、曲がり角等の主要設備周囲や要所の手すりには点字を表示し、視覚障害者の方の安全で円滑な移動を図ることが必要です。なお、点字の表示方法は、JIS規格（JIS T 0921）によるものとします。
- 手すりの側に障害物などが置かれると、サインとしての手すりの役割が果たせなくなると同時に、衝突等の危険性が高くなるので注意が必要です。
- また、視覚障害者の方の円滑な移動のためには、手すりだけではなく、視覚障害者誘導用ブロックや音声・音響案内等の複数の情報伝達方法を組み合わせることが重要です。



階段の手すりの要所に現在階数や上下階へ向かう階段の段数などが点字で示された例。さまざまな建物利用者が気づくように、墨字や立体絵文字も併記すれば、手すりの近くに障害物等を置かれる事態などを抑止することもできる。



手すりに後設できる点字シート<sup>の例</sup>。墨字や立体絵記号も併記されている。